

ヴェネツィアの夜に聴くヴィヴァルディ

福田眞人



ヴェネツィアの夜は、意外に暗い。夏でも人通りは少ない。ホテルのフロントで、夜の演奏会の可能性を尋ねると、コンシエルジェが待ってましたとばかりに二、三をすぐに紹介してくれる。狭い範囲で、ヴィヴァルディのコンサートが二つもあるという。

私は迷うことなく、チェロ協奏曲の方を選ぶ。ホテルのフロントで、すぐにその夜のチケットが買えるのが嬉しい。夏だというのは、涼しいプロムナードを、コンサート会場に向かう。どこまで行っても人通りはまばらで、やっと会場の入口の松明で異空間へ誘われる。

暗い通路を抜けてコンサートホールへ入ると、天井が高い。そして照明が薄暗い。あるいはこの位の明るさが、彼らの目には十分明るいのだと思う。当然、イタリア語の会話で満たされている。まだ始める前の、心地よい興奮が、またどこかで引つ掛けてきたリキエールの微かな酔いが、彼らを饒舌にする。

あらかたホールが観客で埋まると、着席するものが増える。そして、彼らは一様に着飾っている。女性はハイヒールを履き、大きな宝石を首や胸に点けている。すると騒めきと共に、背格好の高い紳士淑女の一团が入場した。どうやら、市長とその取り巻きらしい。あちこちで大仰な挨拶を繰り返す。もちろん女性にはいちいち抱擁で応える。どうやら、今夜は特別の社交的場所であるらしい。興奮は一気に高まり、もう後は演奏家の登場を待つばかりだ。

その時、私は突然、斜め後方から話しかけられた。日本の方ですか、と。どうやら美しいことで有名なフルーティストのマネージャーらしい。楽しみにしていた彼女は、気分が優れず、マネージャーだけが、ホールにたどり着いたらしい。あまりにも甘いビブラートが響き始める前に、もう光はすっかり魅せられていた。(ふくだ まひと)

鯨と亀とカザンラク

梅垣昌子

薄墨のちぎれ雲の向こうに広がる明るい藍色の空に、ぽっかりと穴のあく夜がある。その真つ白でまん丸の窓が見下ろす、波ひとつない浅葱色の水平線の彼方には、薄べったい鳥がひっそり浮かんでいる。そこからひたひたと次第にグラデーションを深めてこちらにやってくる深い藍色の海には、微細にゆらぎながらも一直線の帯となつて輝く月影の道がひかれています。左に鯨島、右に亀島。双子の島で背伸びをしながら十五夜を愛でる鉄紺色の松の影には、うつすらと白い光の縁取りが見て取れる。

「昭和の広重」と呼ばれた川瀬巴水の「松島」を眺めていると、次第に遠近感が混乱する。気づくと額縁の中に吸い込まれ、その片隅に浮かぶ舟の上の巴水その人と共に揺られているのである。深緑の鳥影から浅縹の沖へとゆつくり漕ぎ出す小舟から、純白の満月を見上げて考える。あの窓から流れ出す音楽があるとすれば、それは何だろう。

少ない手持ち札をシャッフルしてみる。貧困な想像力が即座に並べるのは、月の光のフルハウス。しかし、違う。ペーターベンでもドビュッシーでもフォーレでもない。ましてや同時代人の滝廉太郎でもないし、今回、跳ねるうさはお留守である。

脇見しながら遡った記憶のトンネルが暗く細くなってきたあたりで突如正面から放射されたのは、「ブルガリアンヴォイス」だった。これだ。短調や長調の枠組を超え、不協和音が和音に溶け込み、伸縮自在のリズムと圧倒的な音量で、真つ直ぐに降り注ぐ鮮烈なポリフォニー。東西の交差点で育まれクレーテフが再構築した奇跡の調べ。意外だが必然的な昭和の日本の風景との親和性。

なぜ忘れていたのだろう。こんなに大切な記憶を。キリル文字を使う唯一の親友に誘われて行った一九九四年の日本公演のパンフレットが、TDKのカセットテープと一緒に引き出しの奥から出てきた。バラの香水を置き土産にソフィアに帰って行つた、留学生のミレーナの深い褐色の瞳が、ぽっかり空いた窓の向こうでじつとこちらを見つめていた。

(うめがき まさこ)

ミュージカル『マチルダ』

甲斐清高

この夏、ロンドンに滞在したとき、ミュージカル『マチルダ』を観た。『レ・ミゼラブル』や『オペラ座の怪人』など、ロンドンのウエストエンドでロングランを続けるミュージカルがいくつもあるが、『マチルダ』もそのひとつに数えられる。ロアルド・ダール原作の児童小説を、ロイヤル・シエイクスピア・カンパニーがミュージカルに仕立て上げ、ロンドンのケンブリッジ・シアターに移ってきたのが二〇一二年。オリヴィエ賞など数々の賞を獲得し、米國ブロードウェイに進出しても称賛され、トニー賞など、とにかく賞を取りまくっている。

今でもチケットを手に入れにくい演目のひとつと言われているのだが、今回はひとりで観劇ということもあり、残席は少なかったものの、簡単に席が取れた。観客は親子連れが多く、それに若いカップルなど。私のような中年男がひとりで観に行くのは明らかに場違いだが、そんなことも誰も気にしないだろう。

キャストの大半が子供であり、学校の生徒だけでなく、色々な役を子供が演じている。とにかく、主演のマチルダをはじめとした子供達の歌と演技が、可愛らしいとともに、完成度が高くて圧巻だ。マチルダの独唱「ノーツィ」や子供達が全員で激しく歌い踊る「リボルテイング・チルドレン」などは、さすがに人気ナンバーとあって見応えがあった。トランチブル校長や、マチルダの両親役の大人たちのグロテスクでユーモラスな姿や演技も舞台に華やかさを添えている。子供達のアクロバティックな演技もあり、純粋に娯楽として楽しめるミュージカルだった。

マチルダが超能力を持っていることなどが話の筋立てとしては重要なものだが、正直どうでも良い感じで印象に残らない。個々の場面と歌の迫力が勝っている。私が一番好きなのは、カーテンコールの最後に主人公マチルダが両肘を外に張って上を向く決めポーズだ。音楽とは関係ないが。

(かい きよたか)

飲んで踊って、La Vida Loca(イカれた人生)!

新居明子

つい最近、とても懐かしい曲に偶然再会した。リッキー・マーティン(Ricky Martin)の「リヴィン・ラ・ヴィダ・ロカ(Livin' La Vida Loca)」。あのアップテンポなイントロを聞いただけで、忘れていた思い出が一瞬でよみがえった。ただひたすら食欲に、友人たちと楽しい時間を過ごしていたあの頃のことを。

一九九九年の九月から一年間、ウエルズ北部のバンガーという町で最初の留学生生活を送った。同じ学生寮には世界各国からの留学生がたくさんいて、共同キッチンでの夕食時間は実に国際色豊かだった。夕食後は、なぜか毎晩のようにパーティーとなった。少人数でしんみり語り合うこともあったが、たいていはビールや安いワインを飲みながら、友人が弾きギターに合わせて歌ったり踊ったり、大騒ぎした。他の学生から「静かにしろ」とクレームが出ると、皆でパブやディスコ(今でいうナイトクラブ)に繰り出した。当時バンガーの学生がよく利用したディスコは、大学の学生会館内にあり、具体的な料金は記憶にないが、その破格の安さに驚いた覚えがある。耳元で怒鳴らなければ聞こえないほどの大音量で音楽が流れるなか、天井にはミラーボールがキラキラまわり、そして床には、おそろしく割れたビール瓶だと思われるガラスの破片がたくさん落ちていた。行くたびに必ず店内でかかっていた曲が、世界的に大ブレイク中の「リヴィン・ラ・ヴィダ・ロカ」だった。

学部時代いわゆる体育会系の部活に所属していたため、酒宴の経験はそれなりにあったものの、キッチンで飲みながら、あるいはミラーボールの下でガラスの破片をジャリジャリ踏みながら踊るのは、生まれて初めてだった。皆が楽しそうに踊っているのを、参加しないで見ていたいという選択はまったくなかった。あれは私の人生の中で、何とも無責任で利利的で、そして自由で楽しいLa Vida Locaという時間だった。

(にい あきこ)

Nostalgic Memory of a Family Trip

Paul A. Crane

My family often went camping during the school breaks, and the Christmas holiday trip we took when I was ten made a lasting impression on me because it was one of the last trips we took together as a whole family.

We left Michigan on a cold and blustery winter day in our Buick station wagon pulling our travel trailer, the most economical way a large family with six children could travel. Actually, my brother did not travel with us, because as a member of his university swim team, he was obligated to be at training camp, but we eventually met up with him at our final destination and then our whole family of eight would be complete. Since we were to be gone throughout the Christmas holiday, we had celebrated it early by opening up our presents at home the weekend before so that we would not have to pack them in the trailer.

Our first destination was Disney World in warm and sunny Orlando, Florida, a mere 1,900 kilometers away. It took a full two days on the road, which meant about twenty-two hours of driving, a duty shared between my parents. To stay entertained, each of us had our own bag filled with comics, puzzle books, and novels. We also played games together, and one favorite was the license plate game: a race to see who could first quickly add the numbers on the license plates of the passing cars. Music on the radio or from eight track tapes we brought along provided the soundtrack for the journey.

After a few fun days of visiting the various attractions of Disney World in the glorious sunshine, we packed up the car and trailer and headed to our next destination: Fort Lauderdale. This portion of the trip was rather short as it was only about 350 kilometers away.

The aroma of citrus fruit wafting from the surrounding orange and grapefruit groves permeated our campground, and I recall thinking, "Yes, we are definitely in Florida!" Our days were filled with reveling in the winter waves of the Atlantic Ocean and then resting in sand burrows we made on the beach to escape the wind while working on suntans that were to be emblems of our trip.

On New Year's Day, we finally got to meet our brother who was able to leave his swim team for a few hours to visit with us. I recall that he had a very deep tan as a result of training in the ocean. After his short visit, he returned to his team and we packed up the car and trailer again, sadly ending that wonderful family holiday, to return back to the freezing winter climate of Michigan.

And the song that so vividly brings all of these happy and yet, somewhat melancholy memories back was Diana Ross's number one hit song at that time, "Theme from Mahogany (Do You Know Where You're Going To)".

(クレイン ポール)

初夏のバラ園で

高橋直子

かなり昔のことになるが、私は大学院生として米国ミシガン州に住んでいたことがある。ある夏の週末の早朝、私は友達のアさんを州都ランシグ市の郊外にあるFrancis Park Rose Gardenというバラ園まで車で送っていた。アさんはそこで友達夫婦の結婚式に出席することになっていた。Francis Parkは、アメリカサイズで考えると小さな公園ではあったが、Grand Riverが目の前に広がり、公園内の高台に立つと湖畔にいるように感じる。アさんについて公園の中央に向かっていくと、芝生に囲まれたバラ園の真ん中に赤いツルバラのアーチがあり、周りには赤、ピンク、紫、オレンジ、黄色、白など、色とりどりのバラの花が満開の時期を迎え、朝露に輝いていた。ツルバラのアーチの前にはその日のために、椅子が並べられていた。

しばらく待つと、そのアーチの前で結婚式が始まった。私は少し離れたところからその様子を眺めていた。日本人の新郎は紋付袴、アメリカ人の新婦はシンプルな純白のドレスを身にまとっていた。その結婚式での神秘的な光景と音色が今でも心に焼きついている。

牧師の前で新郎新婦が誓いの言葉を述べた。それが終わったかと思うとスコットランドの赤いタータンチェックの民族衣装を身にまとった一人の大柄の男性が、おもむろに参列者の前に立った。男性は大きなバグパイプを抱えている。そして、ゆっくりとケルト音楽の演奏が始まった。

古からの長い時の流れを感じさせるゆるやかで荘厳な音色が、早朝の静かな公園全体に広がる。楽器はバグパイプのみ。残念ながら曲名は分からない。演奏曲はスコットランド地方の民謡、あるいはケルト族のお祝いのための曲なのだろうか。もしかしたら、新婦の女性はスコットランド人の血を受け継いだ人なのかもしれない。

演奏の間、参列者は誰も言葉を口にしなかった。朝の光が差し込むバラ園での結婚式の光景と、神々しく流れるバグパイプの音色が見事に調和していた。ミシガンで出逢った一期一会の大切な思い出である。

(たかはし なおこ)

チャ、チャ、チャ、チャ、チャ。

武井由紀

視界に飛び込んできたのは上半身裸の男性だった。その数は三十人を優に超えていた。皆、両手を高く挙げ、速いテンポで「チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャ」と声を合わせながら円陣を組んでいく。時折、長く深みのある音や、全く異なるリズムの「チャ、チャ、チャ、チャ、チャ」音が重なり合っただけ響く。

二十年以上も前のバリ島での経験だった。地元の舞踊とだけ事前聞いて鑑賞したが、かえって印象深く大脳皮質にファイルされている。Keakは日本語ではケチャあるいはケチャックダンスと言われるのだが、一九三〇年代に芸術家の Walter Spies ヴァルター・シュピースが「サンヒャン・ドゥダリ（バリ島に伝わる悪霊祓いの儀礼舞踏）」の男性合唱と「ラーマヤナ」を融合させた、いわゆる舞台芸術の一つである。現在バリ島を訪れる人々の観賞対象になるものは、このシュピースによって創作されたケチャ舞踏である。村によって上演の方法は異なるようだが、基本的には楽器を一切使用することなく、男性の合唱と掛け声だけで物語が展開し、屋外というだけの素朴な舞台の中で、日没に合わせて、風に揺らぐ炎に照らされながら、踊り手たちがケチャ舞踏を奏でる。

これを機に島嶼国の音楽を好んで聴くことが増えた。BGMならぬBGS (background scene) とでも表現してニュアンスを伝えたいほどだが、気が付けばいつも恵那山が背景に存在する自然豊かな地域で育ったためだろうか、声や手拍子だけで奏でられる音楽の、飾らない力強さがとても魅力的で奥深いと感じる。

(たけい ゆき)

Tremé, la musique par-delà le chaos

Yannick Deplaedt

Tremé est une série télévisée américaine créée et écrite par David Simon, auteur célèbre depuis The Wire. Cette fois-ci, son récit se déroule à la Nouvelle Orléans, dans l'un des quartiers les plus anciens de la ville, Tremé, qui jouxte le Vieux carré français. Ce quartier est considéré comme le plus ancien quartier afro-américain des Etats-Unis. Il se faisait déjà remarqué à l'époque de l'esclavage, alors qu'il était appelé « quartier des personnes de couleur libre ».

La mixité née de la rencontre d'origines diverses a permis de donner à cette ville une culture unique. Ces mélanges de français, de culture créole de la Louisiane, d'anglais, ses influences raciales et sociales, ses origines historiques liées à l'esclavage, à l'exil forcé ou choisi de gens d'horizons divers, ont donné à la Nouvelle Orléans une richesse qui respire dans tous les domaines : la gastronomie, la langue, mais aussi et surtout la musique.

La Nouvelle Orléans, c'est Fats Domino, c'est Louis Armstrong, c'est le lieu de naissance de tant de musiciens que les doigts ne suffisent pas à les compter... La majeure partie des épisodes de la série est composée de représentations, de concerts, d'émissions de radio, de ces gigs dont parlent presque tous les personnages comme si la musique était partout

présente, avalant jusqu'aux dialogues, au final souvent mis au second plan. La langue n'est ici pas faite de mots mais est composée de notes folles, d'harmonies improvisées, de regards nerveux ou amusés que s'échangent les musiciens sur scène, de ces compositions qui vous traînent dans la caboche des heures après les avoir entendues pour la première fois. David Simon nous montre une ville dont les paysages ont été dévastés par Katrina, la rendant encore plus pauvre... La musique est une sorte de dernier rempart contre la folie et le désespoir, changeant de genre comme les gens d'humeur : tantôt matiné de hip-hop, tantôt repartant sur ses origines, avec parfois des instants d'une beauté extraordinaire, comme lorsque le Old Chief Lambeaux pose sa voix sur un morceau de piano.

(ドゥブラド ヤニック)

東方紅

三枝茂人

冷たい部屋の中にヴィブラフォンの静かな調べが響き出す。なんと透明で澄みきった音色だろう。まるで窓の向こうでいま瞬いている冬の星々のような。そのインターバル・シグナルとともに短波ラジオからみごとな日本語が流れてくる。今晩もまた日本向けの中国の国際放送、北京放送が始まった。当時、日中国交が回復して二十三年経った頃の話である。国交が回復の本とはいえ、当時中国に行くことはたやすくはなかった。歴史や中国故事の本を読み中国に憧れを持った私には、隣国である中国はアメリカやヨーロッパよりも遙かに遠い存在で、本の中にある洛陽や西安といった街が実在するという感覚はまるでなかった。遠く海を越えてやってくる電波、それが高校生の私が身近に中国を「体感」できる唯一の方法だった。私が中国とつながる。時の到来を告げるヴィブラフォンの調べ、それが「東方紅」である。当時の短波ラジオはアナログで雑音が混じるのはいつものこと、音量も時に強く或いは弱く注意深く耳を澄まさせぬと意味がとれない。チューニングもそれに依りてすばやく調整する。東方紅も恐らくそうであったはずなのだが、不思議にあの高く澄んだ音色が濁ったり途切れた記憶がない。放送を聞きながら、日本の片田舎に住む高校生の想念は、遙か二千里の彼方へと毎晩飛翔する。ああ、中国は確かに西方に大地を占めているのだ。憧れの中国が。いつか必ずこの目でその大地を踏みそこに暮らす人々を見たい。一種強い恋愛にも似た感情に浸りながら一時を過ごす。心に描く中国の姿は物質的な乏しさに負けぬ心の清らかさに満ちていた。後に東方紅は毛沢東を賛美する歌であることを知ると共に、当時は文革の後期に当たり、人びとは実は「革命」に夢破れ、心の傷と空腹を抱えたまま打ちひしがれていたのを知った。私。恋。は破れたのだが、しかし希望を失い彷徨する中国にやはり寄り添っていきこう、あれのヴィブラフォンが本当に澄み切った音色となって響き出すことを信じて。

(さ い い く さ し げ と)

韓国のデモから聞こえる「民衆歌謡」

齋藤 絢

二〇一三年の冬、凍るような冷たい空気が広がるソウルでは、当時の朴槿恵政権に不満を寄せる人たちが市内の中心部に集結し、大規模なデモがおこなわれていた。当時の私は日韓関係について勉強し始めて十年目、韓国の社会を知る一つの手掛かりとしてデモを追い始めていた。デモが起った日、「急いで現場に行かなくちゃー」と思い、リュック一つ、録音機を二つ首から下げて、当時住んでいた釜山からKTXという高速列車に乗って現地に向かった。デモの原因には、IMF後の公共部門の人員削減と民営化により、非正規職員が正規職員の数を上回る雇用の不安定と失業率の増大があった。労働組合員たちや、雇用不振に対する大学生たち、政治の透明性を疑う市民が一体となってソウルの街を熱気で包んでいたことをよく覚えている。デモのなかに入ってみると、そこには色々なかたちの音楽が、デモという空間を包んでいた。

韓国には、古い歴史の中で悲しみ苦しんできた心の声を歌にのせた民衆歌謡という一つの文化がある。植民地時代、植民地支配がはじまる前の混沌とした時代、植民地支配が終わり混乱した社会情勢と、その後続いた軍事独裁政権、そして民主化を目指した激動の時代に、民衆歌謡は、権力に支配され、どこにも行き場のない民衆の苦しみや悲しみを表現してきた。デモの中で聞こえてきた民衆歌謡は、実に様々であった。七〇年代につくられた労働歌謡もあれば、九〇年代の民主化運動の頃の歌もあったし、集合空間として設けられた舞台で歌っている民衆歌謡歌手の歌もあった。若い世代は、昔の民衆歌謡を歌うことは難しく、ただじっと聞いている。お父さん、お母さんの手を握って体を揺らしている子供たちもいた。色々な形で表現される現代社会の民衆歌謡の多様性は、実に、今の韓国社会そのものだと感じた。そこには世代があり、その世代ごとの表現の仕方がある。韓国という社会と向き合う時に、私はいつも民衆歌謡という一つの文化に心を寄せている。

(さ い い じ ゅ う あ や)

シューベルトでチェロとピアノの追いかかけ

ムーディ美穂

イギリス留学中「来て損したあー!」と思った事は、公共交通機関のいい加減さ。「得した」と思ったのは、観劇とコンサートチケットの安さであった。バイオリンストのウト・ウーギ、そしてロンドン交響楽団のチケットが10ポンドほどだった。会場は聖堂だったので、雰囲気は最高だが冬場は本当に寒かった。そこに古めかしいストープが置いてあったが、その側に座ればトコ夏、離れば北極という空調環境であった。それでも一流の演奏を格安の値段で聞くことができるのは嬉しかった。面白いと思っただけで休憩時間である。聖堂なので、トイレの場所が限られている。そのため、有名交響楽団の団員であろうと、ソリストであろうと聴衆と一緒にトイレに並ぶことになる。控え室もないので、彼らは持参の魔法瓶で立ったまま、会場でお茶を飲んでいた。これが日本公演なら下へも置かない待遇だろう、と思うと気の毒な気がしたものだ。

音楽科の学生による演奏会もあった。演奏の質が少々「アレ」でもタダ同然の値段で生演奏を聴く事ができるのはありがたく、よく通ったものだ。忘れられない演奏会がある。演目はシューベルトのチェロコンチェルトであったと思う。チェロ奏者は小学生にも見えるような、メガネをかけた男子学生、伴奏のピアノは、そのお姉さんといった感じの、同じくメガネをかけた女子学生であった。二人ともニコニコとお辞儀をし、演奏が始まった。少々つかえながらもまずまずの出だし。が、中盤を過ぎる頃、異常がおきた。チェロの爆走が始まったのである。演奏が進むにつれ、どんどんテンポが早くなっていく。お姉ちゃんは必死の形相で追いかける。が、チェロの加速は止まらない。終盤はほとんど別々の演奏と言っているほどであった。追いかけても追いかけても逃げ切れず、「もう無理!」と観念したのか、お姉ちゃんは突如演奏をストップした。弟君は涼しい顔でどんどん進む。そして最後、たきつけるようなピアノの和音が響いた。なんとか最後のところだけ合わせたのだ。一瞬の沈黙の後、会場は拍手喝采であった。もちろん演奏に対してではなく、ピアノの頑張りへの労いである。二人は演奏開始の時と違わぬ満面の笑みで深々とお辞儀をした。片方は汗びっしょり、もう片方は「ボクのチェロどう?」と問うような得意げな笑顔であった。ちよつとしたスリルとサスペンス。生演奏の新たな楽しさをもたらえた夜であった。

(むうでい みほ)

沙漠と無音の世界

地田徹朗

旧ソ連の作家、アンドレイ・プラトノフの小説に『粘土沙漠(タクイル)』という話がある。現在のトルクメニスタンの荒涼としたタクイルの大地に取り残され暮らす、トルクメンに掠られたベルシヤの女とその娘、そして、沙漠を流浪するオーストリア人兵士の物語である。

わたしはかつてトルクメニスタンで働いたことがある。首都アシガバトでの専門調査員としての大使館勤務である。当時、新婚だった私はまだ日本に住む妻を呼び寄せ、何を思ったか、このタクイルの大地を目指した。トルクメニスタン南西部、カスピ海岸から東に数十キロ入った位置にあるホラズム朝時代に交易拠点として栄えたデヒスタン遺跡(写真)。大地一面が干からびて地割れを起こしている粘土沙漠の中に、忽然と街の痕跡である土の城壁とミナレットが姿を現す。この遺跡そのものも無論印象的だったが、何よりも、足音以外には何の音もしない、完全な「無音」状態を体験したことは今でも脳裏に焼きついている。

われわれ以外には誰もいない。いたとしても毒蛇とサソリくらいのものである。そして、年に数回しかない雨が降ろうものなら粘土沙漠はたちまち地上を動くあらゆるものを寄せ付けない泥濘となる。水をこぼしてもなかなか土の中に吸い込まれない。これもまた沙漠なのだ。タクイルの「無音」の中で、私は大地を掴んだと感じた。「地の果て」に来て、力強く生きていくこと、しかし、人間はとても儂い存在であることを思い知った。

その翌々日、我々はカスピ海岸のトルクメンバシ市のホテルに滞在した。カスピ海の波音を聴き、そして、テレビをつけて衛星放送でロシアの音楽番組を観る。流れてくるのは、当時ロシアで人気だったジャンナ・フリスケやラヴィアグラやら。それまでの「無音」とユーロビート調の軽快なポップ・ミュージックとのコントラスト。これからも忘れることはない。

(ちだ てつろう)



「ALEGRIA」——ティファナの思い出

堀部純子

学生時代、海外一人旅が趣味だった。趣味というよりは、大人への登竜門のように勝手に思っていた。そんな私にとっての学生最後の旅は、友人の家族や親友を訪ねて、カナダのバンクーバーからアメリカの西海岸を南下するというものだった。

最南端のサンディエゴに到着すると、友人の大学時代の親友二人が私を迎えてくれた。二人は、アメリカの若者の「リアルな生活」に興味津々の私に流行りのものを沢山教えてくれた。そして思い出にと、サンディエゴからほど近いメキシコの国境の町ティファアナへと連れて行ってくれた。先進国しか訪れたことのなかった私には、国境を越えた途端に埃っぽい衛生状態の良くない通りが広がり、貧しい子供たちが一斉に自分を取り囲むティファアナはあまりに衝撃的だった。そこには私の知らなかった「現実の世界」があり、少しばかり一人旅をして世界を知ったような気になっていた自分が恥ずかしくなった。町の奥へと進むと、男たちが私に向かってしきりに「マサコサマ！」と叫んでくる。この場所でも、遠く離れた日本という国で当時妃殿下になられたばかりの「マサコサマ」のニュースは知られていたようだ。見知らぬ土地で馴染みのあるものを見聞きするとホッとするものだが、ここではなんとエキゾチックな世界なんだとの思いを強くするばかりだった。

二人は別れ際に、当時からアメリカで流行っていたパフォーマンス集団、シルク・ドゥ・ソレイユの「ALEGRIA」のカセット・テープを私にくれた。そう、CDではない、カセット・テープだ。いかにも時代を物語っている。「ALEGRIA」とはスペイン語で「喜び」といった意味だ。この曲は喜びとは何かを詠った曲だが、音楽に疎い私にとってその曲調は斬新で神秘的で、女性の少ししゃがれた半面透き通った、それでいてどこか力強さのある歌声は衝撃的にエキゾチックに響いた。曲調だけでなく、歌詞がイタリヤ語、英語、スペイン語の三カ国語になっているのも手伝ってのことだろう。そのエキゾチックさゆえか、この曲はいつも私にティファナの町を思い出させる。だが、その情景は不思議と埃っぽい衝撃的なものではなく、私を異国へと誘う大きなふんわりとした心地よい空間だ。この曲を聴くことは私にとってまさに「ALEGRIA」だ。(ほりべ じゅんこ)